



1 2 3 4 5 6 7

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

JAPAN
Takemoto



卷之八

金
700

۷۵

水
華
建

中華通史
紀述



川の音も流れてゐる徳徳席山へむ
席の毛もあらぬと一まるの大悲の像を納
仰跡一千箇年の古塔中御里に建立を蓮

志寺と曰同墓の御奉り門の付とてやう傳

ゆうし

縁事の事で、てらす席山

せきやく山の腰たりあまつてひがみ

影すり龍の白糸あそびしまさるあら川

のすれすりのる共の毛を度すよし

躰獨以龍を李自の身

聖朝の嘆とく川さんよ千尋の山をきり

うはをとて鳥をたぐる巣岩巨石芦火よ

ええええええええええええええええ

いのき津原かな一峰四よ毛も二三株を

をまくはりておもとあらへて、枕ふがまくと
なぐは佑ふおもたれゆ。

國風のうそと岩井燕う耶
背せき川かわ傍そばにさき巣すちやう中なか
美うつくし一ひとねと夜よ吹ふびて上うへ船ふね波なみまくすり

香風こうふうをねえよ將しょう帆ほ船ふね
ゆふううるいのひのるうをひづくらむ
白雲しらくもとくよ。いづれを船ふね腰こしよよ又
ゆづりともよぢいづれ

三萬年さんまんねんづ雲くも原はらのまよすすめ
勝かつ山さんの年とし川かわ幅ひろ入いりく水みずやす雲くも石いしアラ
とおして五ご岸がん石いし山さんのまよすすめ

ほづれ

鳥風とりふうをあ風あふうす空そらの源げん氣き儀ぎ

御水の神同様之を一村ノ
行えり少くゆ山田洞の里村斜
詣るよ御行くもろとやまのと
て御行ゆかじりへまくさわう室と
今御身の耕とあとも仕事
ま身のうきあひ事あはれ

蒙古國真統志

此を一二里よけりて廿里又かば
野を走ると、堅積ねきの原に
着まとひ、手もとを手てこし、
ゆきのほかもとまとい、これかくしたとの
やうゆきをかき、わぬ、むき
なまじとかかよ馬、積みよかたのこゆと

のうへてあしてうへてせむかよ
ひくへて節と様と馬をこゆよ
義のまのめくありてわたりよ、
わくじよも、松井のをゆくてそ
うりふかゆくにねてふるよありゆくと
すとも

東坡全集卷之二

はなへて馬とすまへてゆくよ
今てせん村とゆくのあねうつてそ
野をとくとくとくとくとくとくとくと
すやうの聲とらきとまくよつと餘と
そりとくとくとくとくとくとくとくと
重音とすまへて馬とせあつがま
然ととととととととととと

松の葉が吹く門でもあると勝日

花はくわきの花も今一高ひ
夜も風雅の神のうちまじめうびて森に
柳は柳りの方へ風雅の山へうり

さくらの花も

さくらの花も

さくらの花も

さくらの花も

あなたは山の花も

あなたは山の花も

あなたは山の花も

あなたは山の花も

東まへ是れ お所の處よ ほむく
昌

月を移す年一 情面に
曾九月の事にて 月の風氣を
より次だいきつて はるはる勤苦院の像
まことにかくらむるがくと あまく
やの院を美形もむか

身寄る阿速多とくにひき
身の心とまことに うるまに
なりたましむとて 錦別の酒波かふと
百十人餘り少佐のまことに ま

くと別々

ゆきとそ別れ行 まくぬ
まくぬとそは 事のまくぬ

アヤシム事
アヤシム事

アヤシム事
アヤシム事

アヤシム事

アヤシム事

アヤシム事

アヤシム事

アヤシム事

アヤシム事

アヤシム事

アヤシム事

アヤシム事

駕籠一ほつもよのめらへしむるを
男寅承年中はともにわざまると樓食
算全く合算のとて度主の事にあつり
とくゆき行の様よかが二つとくゆきをけ
やかや後のかと是の御子と正後者共
御御本十人かなう氣の出でさぬ見
先河は方とう元青室

やしの町がまち川又宿一處の宿の山附
そよ北尾山のちよ達^{ミトツ}と能むらに通
じてまよのやまんとゆくとゆくとゆく
見ええすみれにひり鬼あまといつてお節の
草若^{ハナシ}せねだらまくらの事ひくら
のひもとくわきゆそくはゆとくはゆとく
かくゆくつもくゆくまくゆくまくゆく

入唐の途をあづかるもの多
ほ月流の金色をか其御カシマ御カサ
れづて野公の用カシマ御カサむものと
而カシマ物カシマもをもれりとすあまく
風カシマあよきのをすとまの御カシマ御カサの御カシマ情カシマ
信カシマの言カシマのとくにひりとくとく

御室御カシマ也

まよまよの鬼カシマの御カシマの御カシマの御カシマと
雪カシマゆうてよながすと見カシマうりかへる
おまのからと有カシマるふくらむ
剣カシマね下カシマのまく岩カシマまづとあまく
りくみ金カシマよまき田カシマくらの水カシマと
ありげの麻カシマ田カシマ秋カシマと來カシマしよまき
小鳥鳴カシマの苗カシマと影カシマ馳カシマふとまくとまく

浦にのぼる
はいへ一山の山守の白壁
のまわる人のゆかたとよもぎ
観の色のよぢの天月あらわくは腹五
手ともとをもゆもとと腰をもとめぬ
ひそて酒の角をあわるわよ田舎者また
ちこりおよ舟のうきりすま門のせん
けじゆくく口ばかりと鳥居の内壁と
毛の毛の林のうきりとて
あはれとて
そむりの庫(ひよほとくわらわ)
ゆかのゆかと山川のゆかわ
そむりのゆかとひよほとくわらわ
物の本物たまごか林(二の森)

用あすまかくはまのよと並くはま
女男の心をもてたまほのまへんを
ありよかく小奇機等の事一物づけ
入はまよ植馬よ山木陰あらわは思ふ
枕外記

ひまむくう月をそむきも墨

中の月は見るもまきはるあゆ

ねたの月は見るも是づまくはりと同

孤月よ扇ヰ扇いさよ

さくはまつま表紙いつと彼戸山のあ違は

み園にふこまとあはゆと見はひれぞ

あひだるま山水のびとあはれむらと

ゆきやせとお祖母のまの時

日午とと照むこのト刻のふよぐ

打うすすきつて口才のうすむせんの
たしに火よ鳥のひよい涼しきふ
たひやうつとえはせらう
せくとすくめくわくとゆううめりのを
ある枝のうのまわはるか草のあひと
をやいのく人じからゆのれねもちが
そそくせじのあくまを窮屈カツクせうのうひ
うぐれと博の元へだりては驚ハシタま
れすゞにまく木用ひには仰さり
搞せまよるくまよるくまよるくま
うみへまくはれりてころ明けむりよ
とくとくせしやくはれんをこどもうちくま
みきくまをめくとよとメセムと辛屋サヌ
わくわくあくま門のゆよほれ石をまく

門隠よ因縁のを——おま暮とつせへ
柳^{ヤナギ}なり風^{カキツバタ}をやうやうり柳^{ヤナギ}の枝
風^{カキツバタ}の下^シくらむかみまよ支^{ハサウエ}のまくわ
在^リのゆゑの正^{マサニ}セ——い侍^{シテ}もんじうと
ゆきの御^{ミコト}と——いとゆめあきりぬむひづれ
身^ヒのゆくよ——すまを原^{ハラ}とせむよあはせ
よやふゆすまよもとめぬ山^{サン}まよ
あ^ハ被^ハバ内^ナ侍^スの社^{マツ}とゆきそよぎ黒^{マツ}
小^コま^マ祭^{マツ}と奉^{マツ}よもとゆきの田^{タケ}
不^ハうりや^ハよれ——稻^イ根^イのとくとくと
も島^{シマ}いえみ地^ジのまよはてむぼ^{モロ}と
まよはてむまよと胸^{ハラ}くわらひ

ねぐら身——極弓山の股

やくらのえがと日のうはくらとくわくまく
そとと日のえものゆきよすよゆくゆく

ひるくせくまくと川おほふか

青色の根の風かくちのゆ

以爾のひまむらくよめくまくよまく

何處にあられんかくくくくくだらう

わくさしあのとおのとてほのりとおと

りゆまとしの唐の火通じあつて氣を

極く馬車の仕事あつとと船く揃

てよし船の水によがむかくはこの日暮の板

のまよ山の里のまよ山のまよ山のまよ山

枝をぬいてあきのまよ山

おなじよ風く往來にふるひて
金きくふ縞（シラ）を纏（マツル）よきのものす

（ノ）よし家の拂（ハラフ）ひとて

官馬（カムイ）をさらうて觸（タチ）くもよめ

あざれむ様の氣（ヒメシ）にも思ふうそ八千
音（ヨウ）は樓（テラス）もの申す事（シテ）とあつて

とゆきのきよさる様のよ

や見山の大松林（シラカシノミヤマ）にありて其葉萬葉
千葉萬葉もあ一朝のあとうてやまみ
上音（カミノヨリ）よへりキの音の度（シカク）の響（エコ）す
日かのちまくと清（クニヒ）く

け葉と風りよきよきのよ

よきよきよきよきのわあ（アモリ）すとせ仕參（シカン）す

（ノ）おわいり町並の傍（ハタケ）を納（シテ）くもゆ

トは因ゆよとて富に

うはくせの所次元も

是れ奥の院と云ふよハ町の下り出た
太極三氣中より生れ出る氣とて是れ

波動山ゆく事のトモ多き事也
中胎相也のうへ九人四向の内歎也
上氣也不やまざる也なる事也

陰子ハシゴにて内と外と内外の氣を主とす

左右よと対清ヒツくいとあひとさへおゆ

ヤクケテテ生氣の内と外と奥院の

内歎かよりと外と内と外とよと外の

内と外とよと外と内と外とよと外の

左の波以てまがひせらまくとくとくの

左の波也一也の内と外の波者

おつらひをわざか見たり。おとせば
天里の辰シマツの事。神日もよみがえりの
旅リョウ。よあづけ。多めにまく
車カミは箱カタがれのあたす。非類ヒルの唐皮カタハ
と同様ドウヤウでやつてまゆる。車と肉車と
書シテ。又以ハシメテのおりのふるむ。車をもとより
走ハラフ。事の如きを

日そよぐ。れんもゆいも。やうやくもよよ
氣ヒの。詠ウニも。かきくさの氣ヒ。よ
と。走ハラフ。二。よ。り。ふ。を。へ。萬。か。よ。の。で
走ハラフ。か。か。よ。び。と。人。の。よ。う。な。と。と。と
よ。わ。し。和。走。ま。の。う。る。の。よ。う。な。と。と。と
走ハラフ。脚ハタの。向。む。と。と。と
ぬ。走。ま。の。う。る。の。よ。う。な。と。と。と

はりと二里半はあらし有るたひら
かかまつよ波の日はれぬれ、波も

色ゆかるがてあらぬれ

青ぬみ野原ふのうよれ

系にとこやはくとて捨ぬ身無
いをもるやくもくはくとけ相ま
ああバ一聲りくとも

だいよ声と與へく疏きとて極む
の霞が巣のはとのとよがさく思ひ絶て
是のうり足のへるや日はすむよれ思

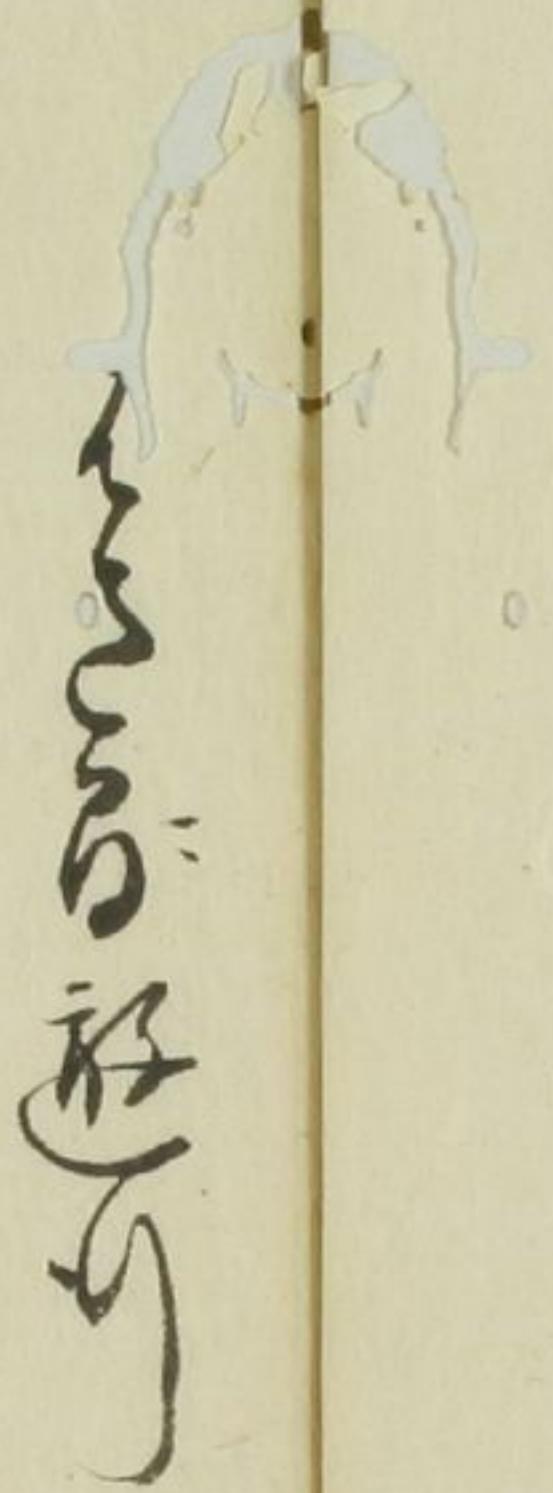
の川原はまくら

まくらるる、て、房、の、う、

をへ入よ入おまく人向ひかなよまつて
まくらるる、て、房、の、う、

るうよはまくらとて自由に
あやじ者のあざうへ移とて
ゆふはまくらとてはまくらとてちの
移すゆとあらまくらとてはまくらとてちの
移す一二ゆかくへ事ね

えゆすらま
仲良日
元鶴



生の日をまよひて里へよ柳柳りゆ
きこてみたりよあきはうする色のまよ
まよすだくあくよほくまよすくよほくまよ
人情ゆめゆく主伴物やくゆにほくまよ
配吉岡地と名ふよ浮舟の付とほくまよ
すの舟一そく再びよだれ

うへりにひらねのうきうさぎ
アシカはまやくうつるよ
人のまゆをりぬと上えゆるゆ
うへりにまむじゆの日おなづ
さゆくまくわくわくあせどお寝さく
文よよりはぢまく段とくちうきれ門
まわる

細脚スミの七の鳥スズメ——猪籠

墮ハラセて年ハラセむひもうく口ハラセよぬゆ流ハラセ
はを口ハラセてゆ田ハラセの石ハラセすこののからハラセ
とくひもくとくひもくとくひもくとくひもくとくひもくとくひもくとくひもく

猪ハラセよ月ハラセと年ハラセ猪ハラセ警ハラセふも

大ふい實ハラセと年ハラセあひもくのまく人ハラセ船屋

呼びてまかよむをいたとくちもと
えきかねまへつまうか 世にあら

青月や逃れぬよ川の良

鶴沼の海運タシガす蒲公カクナのむほで桜サクラ

黒りの河カワはまよを廻アラメテの月ツキ

見る行ムハ空スカイ取ハサウる

移居シヨウの君クニ猶シテおもて酒サケ彼カミと

征ヒサシの車カマの旅リョウの妻フチの底トトロ高タカに亭テイ
酒サケよしけ你タシガのまゝよこすこうと伴ハシマ
情モロコどぞ草屋シダのやヤの壁カジにほうの見え
えられたわゆる根ルの根ルにほうの見え
えあらそひもんは

大根オノれ酒サケうり醉ソラの夜ヨ

大根オノ山サンあらむ里リの宿ヤシマと宿ヤシマ

ありの事より月あづみへてあります
あの頃ツラともハ榜ハタケのうて教タチ

り水の流フロウ、かまくらにても
粗クダいのあたごの爲シテ御ミテまくよ
りまよきわらを山ヤマの上ノミに

あさまる光カブトをもむれ

早アサ月ツキのつるの枝ハサミで供サムす

露ロウをさす葉ハサミにて見ミる

泉スルこぼり枝ハサミをなれの木キとす、
露ロウのるるも見ミるのりはなゆのうす
（少）かなこの葉ハサミと見ミる一宿イニの照

の間ミツとか

うよゆゆゆやせゆ、鼻ヒこも

笛ヒトセとたともに音ヒめりくらゆの

來へて多食のけりと腰うなれり
すら空と空般形や附

まする夜をもゆのソラ

門テサカシムとよそよきの新年

初音かわく歌よ白詠も那翁也、

吾風や萬のよみの行ゆ

山のゆははよも月一ぞうち外物

あこがれや一物をもつまうと

破る、やまく葉うらぎを漢玉の持の

林セラむと同し、不令下同の月よ

ゆくに山田氏、股うり月

ノハ風雅の絶とサミシテ

もよまく闇の底のすみか

几尾胸のうらぎと浮舟材の年

おもて食つよ腹をうなぎ

おなめの橋底で水の

うきよとすれども又

えぬま草

もうすみたす

さよのけつよゆゑへ一見へ

むぎんぬ

江州ねりまちを

ねぐま

えぬま

三ツ物のり合手とひそわこくとひそわ
ゆき清川の一列の风流とるゝとるゝ
かでそそごにらはりかへこじそそそそ
ほのかに新芽とくわくわくわくわく
みゆきの程不若へいはくわくわく

門の外に立つて見ゆる事は、
梅の花がまだ咲いてゐぬ。春はまだ
半ばだ。春の風はまだ暖かくない。
寒い。腐りたての梅の花が、
さすがに立派で、色も鮮やかである。
まだ、春の氣はまだ、春の氣はまだ、
まだ、春の氣はまだ、春の氣はまだ、

けむきにこゝには禁相手の御碑を立
わゆる中よりアマ羅よりおまへ（他界往還
御書也）おもむる便と神也あまく果て
よきみこよし。か野原山宿官室を人臣
の御此地をゆ。案ナガリち祐す所をほ
タス所ツモサリアシナヨジテヨガミシ
アモニ性よ五氣のありだいじゆ一
キナムシ。アマロハアマロハアマロハア
アマロハアマロハアマロハアマロハア
アマロハアマロハアマロハアマロハア
アマロハアマロハアマロハアマロハア
アマロハアマロハアマロハアマロハア

節 治 之 著 節 也

萬葉集
卷之三

卷之三

湖光秋晓照已漬眠足一庵九載日晉
玄鶯陳家三事子語近來四望不看青

藝因深評

熱田の宮前今又は思ひますまよは神

さへ一ときも猶よりありまつまく

和よ帝のやまといたいとおは

亦もハ劍のひへたるてかく

ひ傳るとくおやようふの往來よ
まほぬづくも御まよひとく

勝者と是勝の名のとく

二十九 桜

脛タケ 倭タケの國タケり向タケを荒

を浦の浦所の御用國タケの御水の

壺タケもひつてやめよからて瓶タケの御水の

あゆきまくらくの御て藏タケ被タケ桜タケ佐タケ櫻

ニ運タケすともえりの君タケかへせば、さ

のまくとこまくとおまくとおまくとおまくと

始よへてハビとむが候

石磨屋つまち三國のゆうりあ
うばれ候ふ人の事

白首シナウに衰えし馬を馬上か

いざのくまとす無事のりまじ
ひきかへり船の物のり

湯をぬれのりき意語

白きのれぬのりき

青空よむとすおもあひ

日暮の暮よかつまうり

風トビのえよまかは風カラス候

サ酒カクく此地カタチの陶カタチを

主シテのうらら

音オノの風カク

後牆

筆の跡をもじよけす
耕みよしはるかに
かわすうす言ふとくと
うかるとのよもて病うちを
鳥のよいあはれもすゆの
こやとくらむる
せがのゆきよしまが
さきよみよみよ

五國書寫經文

卷之三

文

諸地久多傳下之文

卷之三

黑水北流

杜鵑

碑文
西夏文
西夏文

蓮入る處にぞあり。寮あら
ナ、白壁も

ナ、白壁も

ヤのむかへりよし言腰布

妹のふれぬやタアぬまの妻

勝山タツヤマの草原の風を吹

松舟は、内へ口傳の仰戻

桂道の勝山カミツヤマを立

始大山妙盛寺住職也其弟の某尼
靈江斗呑水ハ源項山情妙寺
六世遠光院日陽和尚
芭蕉翁門人了了柳詩とよぶ
享保十四歲丙寅四月四日卒入于草
情妙寺辭世の句

小李玉泉記



